「正義」を信じぬ者達の戦い

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
「正義」を信じぬ者達の戦い

【Ｎコード】
Ｎ２５５５Ｙ

【作者名】
Ｌｏｌｏ

【あらすじ】
ｓｋｙを、筋道の通ったものに書き直そうと思い立ち、始めました。ｓｋｙの主人公だった彼は降板しました。戦闘シーンはぎりぎりまで減らされて、恐らく政治関係の話が多いかと。爽快感は（元から無いが）、多分ありません。タイトルからお判りになるでしょうが、暗いです。魔族とか、空飛ぶ船とか盗賊とか、オールカット致しました。

同盟１（前書き）

いきなり、【残酷な描写あり】です。

同盟1

「酷い……」

馬上の青年は呟いた。彼は、今までに幾つもの戦場跡を見てきた。だが、ここまで酷いのは久方ぶりに見る。……そう、彼の故郷の戦場跡を見て以来。微かに頷いて馬を寄せてきた女は黙って既に乾き始めた血の海に身を投げ出すミュリエル兵達を見ていた。

「少年騎士も女性騎士もいたようですね」

「違うわ」

青年の言葉に、静かに女は反駁を唱えた。

「こんなもの、少年騎士でも女性騎士でもない……。敗戦確実となっても降伏せず、救える命を救わなかった国の犠牲となった子供と女よ。正規兵が何人いるか判ったものではないわ」

黙って頭を垂れた青年は、もう一度、回りを見回す。銃器で一瞬の間もなく命を絶たれた者、剣で切り裂かれ、苦しみながら逝った者。それよりも惨い姿なのは、打撃を受けた死体である。頭蓋は割れ、脳髄が飛び散り、男なのか女なのか若いのか老いているのかも、もう判らない。

「恐らく、魔獣も使われたのね」

人の使う刃物ではどうしても付きようのない、鋭い牙で食いちぎら

れたような傷、地に残る深い足跡、それから倒された木と破片となった鎧、焼けこげた死骸を見て女は更にそう呟いた。

ここは、ミュリエル王国国境付近。昨日まで、セデとミュリエル軍の戦いが行われていた。結果は、誰の予想を外れる事もなくセデの圧勝であった。他国の者達は恐らく、今や世界最大の軍事国家になりつつあるセデ王国にいわば喧嘩を売ったミュリエル王に呆れ、ミュリエル国民に酷く同情しているだろう。それほどに、ミュリエル軍は惨敗した。

今や、世界最大の軍事力を持つセデ王国である。騎士達の能力もさることながら、最新鋭の武器を全てに与える財政的余裕、魔獣を召喚して従える事の出来るルーン・マスターを世界中から集める人材の豊富さ。全てに於いて、セデがミュリエルに負ける理由は無かった。

旅衣を纏った2人組の男女は一人のミュリエル兵の横に馬を止めて、まだ少年と呼べる年頃の兵を見下ろした。埃まみれの銀髪、引き締まっているというよりも痩せた身体、鎧はあちこちがへこみ、兜は投げ出されている。剣は折れ、生きているのが不思議だった。だが、どうやら、その身体は死後硬直も始まっておらず無惨に砕けた鎧の下の胸部が微かに空気を求めて動いているようだった。

「おい、生きてるのか……意識はあるか、君」

青年が声を掛けても、反応はない。
声を掛けた金髪の若い男が馬を飛び降りた。少年兵の息があることを改めて確認する。それに隣にいた赤毛の女も続いた。
「酷い傷ね。意識もあるかどうか……」
あったとて、喋ったり顔を上げる体力は残っていないはずだ。
「どうしましょうか……。ミュリエル兵ならば、俺達の敵ではないですし」
男は同じ年頃の女に対して、丁寧に意見を求めた。
少し考えた後、女は頷く。
「仲間になってくれる気が無かったとしても、助けて悪い事はないわ。馬も余ってるから乗せていきましょう……その前に応急処置ね、手伝って」
「判りました」
今や身を守るものではなく、負傷者の体力を悪戯に奪う重荷となっている鎧を剥がし、大きな傷は薬を塗った上で布を巻いてやり、細かい傷は丁寧に拭いた。
「ミュリエル王国も、馬鹿な事をしたものだわ」

馬をゆっくり歩かせつつ、女は呟いた。

「セデに滅ぼされた国がこの数十年で幾つあるか、知らない訳ではないでしょうに」

「ええ。我々の祖国もセデに潰された」

遠くを見るような目で、女は言う。

彼女達の国は、数年前にセデの侵攻を受けて滅び去った。セデはまさか、大陸全土を支配するつもりではあるまいか……というのは、いつから囁き始められたのか大抵の者は忘れてしまった。セデは、まるで巨大な象が蟻の群れを踏みつぶすが如く、小国もある程度の軍事力を誇る国も潰してきた。今や、セデとまともに対抗できるのはビリアス帝国だけであろうと言われるがビリアスは対外不干渉主義を貫いておりセデの侵攻を阻んだり、ましてやセデを潰そうなどとはしない。セデがビリアスに戦いを挑めば、ビリアスは打って出るだろうが、セデはそんな事をしないと思われる。少なくとも、当分のうちは。

さて、そんなセデの侵略により、国を失った者達が1つの自治都市を作っている。同盟都市と呼ばれるそこはセデ侵攻で生まれた難民の逃げ場であり、そして、戦いの場であった。

彼らは、セデを打ち倒そうという夢物語を描いているのではない。ただ、彼らは自治都市を国へと広げ、彼らの自由を取り戻したいのだ。無論、多くの被侵略国はセデの監視下に置かれているから、取り戻そうとすればセデとの衝突は必至である。だが、彼らはそれでも戦う事を選んだ。

少年兵を救ったこの２人もまた、同盟都市の住人であり、同盟軍の重役なのである。

同盟2

金髪の青年、レピュスは自分達が戦場から連れ帰った少年の様子を見るために病室に入った。白を基調とした部屋造りで、薬品の匂いがする。同盟軍の中では、作戦室に籍を置く彼はここに寝た事は殆どないといえる。

「俺……何で」

少年の第一声はそれだった。何故生きているのかが、不思議で仕方がないのだろう。当然である。

「ああ、起きたか。そろそろかと思って来てみたんだ。記憶はあるか？」

レピュスは笑みを浮かべてベッドに近付いた。彼の背は余り高くないが、大人びた顔立ちで、なかなか端正といえる。青い目は少々つり上がっているが、意思が強そうに見えても厳しそうには見えない。

「……ここは、どこなんだ？　それから、何で……」

だからか、少年は怖がりもせず、すぐに尋ねた。

「まあ、1から説明するよ。俺はレピュス。お前は？」

「アンフィス」

レピュスは頷くと、ベッドの脇にある椅子に座って彼らがアンフィ

スを見付けた状況、ここがセデによる侵略で祖国を奪われた者達の都市である事を語って聞かせた。

「ええと、つまり……俺、生きてるんだ？」

アンフィスが率直な感想を述べると、レピュスは笑った。

「当然だろ」

しばらく考えていたアンフィスは尋ねる。

「何で、助けてくれたんだ？」

「俺達の目的が、セデの侵略から逃れる人々に手を貸す事だってのが1つ。それから、そういった人達の中から力になってくれそうなのを探すのもある……で、アンフィスはその両方だった」

「多少は戦えるけど……。一兵卒レベル……」

「なに、無理に戦えなんて言わない。ここは、自由を売りにしてる都市なんだから。ここにいる以上、誰一人として戦いを強制される事はないんだ。……だけど、多くは戦いを心に誓ってる。自分達の国を取り戻したい奴、家族や友人なんかを奪ったセデに一矢報いてやりたい奴、その他も色々だけど……」

アンフィスは、少し考えていたようだが、すぐに考えは纏まったらしい。

「俺……このまま、終わりたくない」

レピュスは、真面目に少年を見つめた。アンフィスの、まだ幼さの残った……しかし、一度死線をくぐり抜けた者だけが宿す色を既に持った茶色の瞳をじっと見た。

あまり、勧めたい道ではない。
だが……それを止める権限は自分には無い。

「なら、戦える。そういうところでもある。
じゃあ今日は休めよ。明日、同盟軍の代表のところに連れて行くから」

それだけ言った。

「それって？」

「ノゴロスさん。この都市の市長でもある人だ。豪快な良い人だよ……。出身は、アルグロワ。セデの北方に位置する国で、１５年前に滅ぼされた国。アルグロワ出身の重役は多い」

「……判った。
その、……ミュリエルは？」

レピュスは一瞬、目を反らしたが、溜息をつくように言った。

「間に合わなくて。お前しか助けられなかった」

「……そっか」

同盟都市、自由都市、様々な呼び名があるこの都市はセデから遙か西に離れ、ビリアス帝国を更に越えた位置にある。陸路からはビリアスを通らなければ、セデ王国が攻め入る事は出来ないし、海路は途中にある潮流の非常に不安定な岩場のお陰で非常に困難な旅路となるから敢えてそれを実施する程、セデに同盟都市討伐の意欲はない。それが例え、一時の事であってもこの場所は安全なのだ。

緑の豊かな地方で、農業、牧畜が盛んに行われているから殆ど地産地消で食料はまかなえる。海に面してもいるため、漁業も行われている。また、この都市に住んでいる限り戦いを強要される心配が無いために、戦争の行われていない地域からも職人などが集まり、高い文化を作っている。

都市の建物は白が基調で、非常に晴れやかな光景である。その中心部にあるのが、同盟軍本部と、政治府だ。アンフィスはその、同盟軍本部の医務室に連れてこられていたわけだ。都市そのものの面積に限界があるため、自然と主要な建物は縦に伸びる。同盟軍本部も5階建ての建物である。四季の変化が目まぐるしいこの地方らしく、様々な種類の植物が目を楽しませる庭園が広がっている。

そんな庭園にレピュスは出た。捜し人は大抵、ここにいる。

「フュリーさん！」

「レピュス」

短い赤毛が風に舞うのを押さえながら振り返ったのは、アンフィス

を助けた時にいた、もう1人だ。優しげながら、気の強さも見える緑色の瞳は夏であるこの時期、庭園に映え広がる緑色の爽やかな芝生に似ている。

「あの少年兵……アンフィスは目を覚ましました。同盟軍への入隊を志願しています」

「早いわね」

驚いたように笑ったフュリー。

「……もう少し、悩めばいいのにね」

その瞳に映った哀愁の色に、レピュスが戸惑うと、彼女は済まなそうに笑った。

「ごめんなさい。別に、非難してるんじゃないの。

……判った。私が明日にでも、ノゴロスさんの所へ連れて行くわ」

「お願いします。俺は、作戦幹部の連中に伝えに行ってきます」

何となく、疲れたような面持ちでレピュス。察したようにフュリーは苦笑した。

「お疲れ様。作戦幹部には変わり者が多いものね。普通なあなたが珍しいわ」

「全くですよ。作戦部の募集に“凡人歓迎”って書きましょうか」

フュリーは笑ったが、レピュスの方は、なかなかに本気の様子だっ

た……。

翌日、目が覚めてみるとアンフィスのベッドの横の小さなテーブルには清潔な衣服が用意されていた。それから初めて、今、自分が着ているのが自分の衣服でないと気付いた。病室の住人らしい、白くゆるやかな上衣とズボン。

昨日、レピュスという青年に「ノゴロスさん」のところへ連れて行くと言われた事を思い出し、その為にベッドサイドに置かれた服に着替えろという事なのだなと納得した。病人服で行くわけにはいかない。

着てみると、流石にぴったりとはいかないが、大き過ぎず小さ過ぎず。サイズ合わせをしていないにしては上出来だ。レピュスの着ていた服とは随分違うところを見ると、同盟都市には標準的な服装というものは無いらしい。アンフィスが今、身につけたのは黒い丈夫な生地のズボンとすっきりとした白いシャツ、腰の上までの丈の短い革のジャケット。

着替えて、さてどうすればいいかと考えていると、ドアがノックされた。

「入っても大丈夫かしら？」

レピュスかと思ったら、女性の声だったので驚きつつも

「大丈夫」

と答えた。
入ってきたのは、短い茶色……というより赤毛を持ち、爽やかな緑色の目をした若い女性だった。

「着替えたのね。元気そうで良かったわ」

「ええと……」

「私はフュリー。同盟軍戦闘部隊幹部……通称武幹。よろしくね。取り敢えず、あなたには戦闘部隊に籍を置いてもらうことになるから私がノゴロスさんのところへ案内するわ」

自分よりも背が低いくらいである女性が、軍の幹部と聞いて驚いているようだった。無理もない、と思って笑みを作ったフュリー。説明してやることにした。

「私は、ルーン・マスター……魔獣召喚士なのよ」

「魔獣召喚士！」

更に、驚いた顔をする少年。彼女が剣の名人だと言われるよりも、寧ろ衝撃的であったようだ。

今、軍の中で最新鋭の武器を揃えるのと同じだけ熱心に集められているのがルーン・マスターである。太古の言葉を操り、異空間の魔獣を召喚して従わせる事が出来る者達だ。世界中でも千人をやっと超えるかどうかと言われる、特殊な力を持つ人々である。
だが同時に、戦闘とは縁の無さそうなフュリーが戦闘部隊でそのような高い地位にいる理由が判るというものだ。ルーン・マスターは、

訓練を積めば積むほど強大な魔獣を召喚できるようになるが、先日の戦場に来ていたセデのルーン・マスターはドラゴンを召喚した……。ただ、そのコントロールに不備があってその所為でセデ兵も半壊状態であった。恐らく、その為にアンフィスは留めを差す事を忘れられて助かった。なかなか、皮肉なものである。仲間達の半分以上の命を奪った魔獣に、命を救われたようなものだ。

「ここって？」

アンフィスが廊下を歩いていると、質問してきたので答えたフュリー。

「同盟軍の本部よ。同盟都市は軍部と政治府に分かれていて、ノゴロスさんがそれを統括しているんだけど……。問題も多くて」

「問題？」

「まあ、いずれ判ると思う。
あなたは軍部に所属してもらう事に殆ど決定してるけど……もし、嫌ならやめていいのよ。家は提供するし、仕事も紹介するわ。何も、軍人や政治家になることだけが同盟都市の選択肢ではないから」

「……軍人にならせたくないみたいな言い方だな」

子供扱いをされたと、思ったのだろう。不機嫌そうな声である。
フュリーは振り返って、苦笑した。

「だって、碌なものじゃないもの。
自由の為の戦いだなんて、聞こえは良いけどやっている事はセデと変わらないんだから」

「セデと変わらないって……」

「そう思う事が出来ないのなら、本当に、戦わない方がいいわよ」

フュリーの言葉に、僅かにひるんだアンフィスだが、答えは変わらなかったらしい。

「ここでの戦いがどういうものなのか知らないし、フュリー……さんの言ってる事もよく判らないけど。判らないものは、やってみないと判断できない。それに、レピュスにも言ったけど、このまま終わりたくない」

今や、並んで歩いてアンフィスの表情を観察していたフュリーだが、溜息と共に笑った。

「そうね。言うとおりだわ。
判って、それでも戦いたかったら続ければいい。でも……判った時に生きているとは限らない事だけは心に留めておいてね」

穏やかな口調が、余計に説得力を秘めていた。

ファーレーン1

同盟都市とはまた別に、国籍などを一切無視した人々が集まる自由都市がある。ここは正式にファーレーンと名乗っており、同盟都市とは違ってセデに対抗の意思を持っていたり、戦争から逃れた人々の行き場になっているのでもない。ここは、無法者と商人・職人の都市だ。

一見、相容れないように思えるその2者であるが、彼らは互いを必要としあっている。盗賊達は、武器をファーレーンで揃える代わりに気に入りの店に彼らが持っていても意味を成さない武器の強化に使われる魔石を渡し、商人は良い魔石には良い武器で応える。また、海賊はファーレーンの造船所で船を造り、その港町で誰に取り締まられる事もなく、ゆっくりと身体を休める事が出来るし船上にて必要な物品はファーレーンで全てが手に入る。宿場、料亭、商店……それらは無法者によって生活が困る事ない。

また、ファーレーンの者達はここに身を集める無法者達を全面的に信頼する事は決してない。各店に1人以上は大抵のごろつきなら片手で捻り潰せる用心棒を雇い、武器屋になる者は自分自身も武器を使いこなす者が多い。

この都市が出来たばかりの頃は、用心棒達に潰された小さな賊徒集団や武器屋の商品で殺された賊徒も少なくなかったが、その数が増えるに従って彼らは都市の人々に手を出す事が無くなって、もしかするとここは、全都市で一番の賊徒による被害が無い都市となっているのかもしれなかった。

そんなファーレーンの中で、最も儲けている店は路地裏にある。全体的に商人気質の活気ある人々が集まる都市であるから、路地裏であっても暗い雰囲気とは無縁だ。店の前を通る客……賊徒達を大声で呼び込む武器屋、防具屋、宿場・飲み屋の者達……。

その路地裏で、寧ろひっそりしている方に入る一軒の店。たいして大きくもなく、普通の家を店に改造したようにしか見えない。一戸建てのその家……武器屋はしかし、ファーレーンで一番の有名店なのである。

「リザ、注文書だ」

「あーはいはい、そこ置いといてー」

店の奥から走ってきたのは、もうすぐ３０代の溌剌とした雰囲気の女。この武器屋の店長、リザ。この店には店長と２人の従業員しかおらず、その２人も大抵は武器の配送や原材料集めの為に店を出ているからここに３人の人間が揃っている事は非常に珍しい。

黒く、くせのある髪を高いところで纏めているリザは顔や手に機械油（オイル）を付けている。さっきまで、銃の整備をしていたのだ。そんなリザにタオルを投げ渡した女は、リザの古い友人であり運送業と実力行使の原材料集めに精を出す店員、ルシエル。

ルシエルは、美しい女性である。他に類を見ない……と言っても差し支えないであろう。白銀の長い髪は櫛上げられて頭頂部に近いところで１つに纏められている。少し残した左右の髪が、女性らし

さよりも中性的な美貌を見せるほっそりした顔を縁取る。青い瞳は、空の青さよりも深海の暗さを称え、非人間的な美貌を更に神話めいたものに仕上げている。

リザも決して、顔立ちが整っていないのではないがルシエルと比べると何の変哲もない顔立ちに思われてしまう。だが世界一の人気を誇るこの武器工房唯一の職人に、そんな事を気にしている時間はない。

「ふんふん、またセデか。あそこも飽きないわねー！」

リザはルシエルから受け取ったタオルで手を拭いてから注文書を開くと半ば呆れたように言いながら、

「ま、そのお陰で私達は美味しいモノ食べてるんだけど」

と付け足す。

「同盟都市からも来てる」

ルシエルが短く言うのを聞いて、リザは一つの封筒を見た。

「へえ、そう。何だかなあ。セデに反抗するのに武力を以て反抗しても意味がないと思うのは私だけ？」

「いや、同感だ」

涼やかな声でそう言ったのは、ルシエルの横に座っていた男。長い金髪の色素は大分薄く、ルシエルと並ぶと銀髪が2人いるように見える。肌の色もまた、白いどころか血管が透けていないのが不思議

なほどで病人めいてさえ見える。その顔の中で、紅い目だけが存在感を強く押し出している。彼はアルフィア。ルシエルと共に動いている。

「しかし客は客、それ以上でも以下でもない……はあんたの言葉だろ？」

「ま、そうなるわね。
そうよ。武器をウチから買ってくれるなら神だろうと悪魔だろうと同じよ」

「武器を求める者なんて、全部悪魔さ。私達はそれを世に蔓延らせるわけだから、更にタチが悪い」

ルシエルが皮肉めいた笑みを浮かべつつ言った。

「セデの侵略戦争は終わるのかしらね」

「まあ、いつか侵略する土地が無くなるだろうよ」

リザにルシエルは、セデへの悪意さえ込めて答えた。

「世界なんざ統一してどうするつもりか知らないが。所詮、待ってるのは行き詰まりと反発だ。
それを目にするまで、それに気付けないようじゃセデの国王陛下もダメだろうよ」

「……兎に角、武力で武力に対抗しても、何も変わらない」

アルフィアが、どこか歌うような声で言う。

「武器を売って生活を立てている我々が言えた立場ではないが、武力で平和を勝ち取る事は出来ない。武力を以て、例えば同盟都市軍がセデを打ち破っても、セデの者達がそれまでの同盟都市の者達と同じ感情を抱くだけだ。戦いは終わらない」

何となく静まりかえったところで、リザが突然立ち上がった。

「ま、いいじゃない！　私達は、このままでもさ！
私も余計な事言ったわね。この辺で止めときましょ。で、良い酒があるんだけど？」

「ああ、飲もう」

「……そうだな」

ルシエルもアルフィアも、反対しなかった。この3人は揃って酒豪であるし、戦争と平和の話をするのは明らかに柄でない事が自分達で判っていた。

戦争が無くなれば、武器の需要は一気に減るし、他国へ払っていた各国の注意が自国により一層向くようになるので賊徒の取締も強化されてしまう。そうなれば、汚れない、格好だけの武器を持つ衛兵くらいしか武器を必要とする者がいなくなる。彼女らにとって、それは大きな損失なのだ。

『戦争が私達の育ての親』

とはリザがよく言うところである。
当然、それを誇りに思ってはいないが。

「ミュリエルの戦場からも同盟は人を引き抜いたのかしら」
例え、道義めいた話を抜きにするとしても戦争くらいしか話題が無い世界だ。必然的に、先日の歴代ワースト3に入るのではないかというほどの戦争に話が向く。

「むしろミュリエル人は、1人でも生き残ったのか？」
ルシエルがそう言う。彼女達は戦場を見てきたわけではないが、世界各地のどんな場所にでも行き、どんな話でもする吟遊詩人達の話で大方の状況は知っている。

「俺の聞いた話によれば、最強種の魔獣をセデの魔獣使いが召喚したものの、扱いきれず敵味方共に壊滅させたというが。生きていたとすれば、余程、幸運な者が数名だろう」

「魔獣っての、私は見たことが無いんだが。そんなに恐ろしく、強いものなのか」
ルシエルが言うのに対し、アルフィアではなくリザが些か興奮した様子で答える。

「そうよ、とんでもないんだってば！
聞いた話だけど、通常の虎よりも何十倍も大きくて力がある奴だとか、そんな図体で火を噴くだとか、物語で有名なドラゴンだって時には召喚されるそうよ！」

「聞いた話だろ」

ルシエルが疑り深い口調で返すとリザは不満そうに唇を尖らす。

「それだけ大戦力になるんだから、セデが高額を叩いて世界中から魔獣使いを集めてるんでしょ」

「少ないのか、魔獣使いは」

「もー、ルシエル。あんたって、ホントに興味無い事には徹底的に興味ないのね！
そうよ。貴重な存在ってわけ。だから、武器が売れるのよ。１０人に１人が魔獣使いだったら、武器なんて戦争に必要ないわ」

成る程、確かにとルシエルは納得したらしい。

「ま、つまり、そんな目に遭っても戦場から手を引かないミュリエル人がいたとしたら余程の馬鹿か勇者ね」

「“勇者”は常に馬鹿だろう。……それに負ける“悪”は更に馬鹿だという事になるが」

「ったく、アルフィア。お前は吟遊詩人か」

「よく間違えられる」

3人は笑って酒を飲み進めた。

同盟3

「レピュス室長、あんなひょろひょろをどうするつもりなのです」

「ハー君ってば、自分の体格、鏡で見たことあるの？」

「黙れウラヌス。俺の摂取する栄養は全て脳に行っているのだ。脳も身体も中途半端な貴様には何も言われたくないな」

「おや、大層な言い種じゃないか。この前の作戦は僕のものが採用されたし、君は腕相撲でフュリー殿にだって敵わないだろう？　非力で中途半端な頭脳しか持たないのは君の方さ」

「あれは偶然だ。ノゴロス殿の気の迷いだろうよ！」

「ああもう、2人とも黙ってくれっ！！」

レピュスは思わず声を上げた。作戦室は、仕事が無いといつだってこうなるのである。作戦室室長のレピュスがいても、大して変わらない対照的な2人の名参謀の子供じみた口喧嘩……。

「レピュス室長、どう考えたって僕の方が優秀でしょう？　今時、参謀も自分の身くらい、自分で守れないと」

レピュスにそうやって意見を求めたのは、長い金髪と藍色に近い瞳を持った若い男。同盟軍参謀の1人、ウラヌス。その顔は、男女ともにうっかりすれば見入ってしまいそうな美しさである。瞳は女性のように大きく、唇はふっくらと愛らしく、肌は白く見るからに滑

らかそうだ。体格はというと、背は中程度だが決して弱々しい雰囲気はなく、実際に剣を上手く使う。

その正面で

「貴様の、前に出たがりの性質の所為で、我々が今までどれだけ危険な目に遭ったか。好戦的なノゴロス殿が貴様を高く買っているから致し方ないものの……俺が軍のトップであればさっさと戦場の最前線に送り込んで名誉ある戦死をさせてやるところだ」

と、プラスイメージの言葉も全て皮肉であるような喋り方をしているのがハー君こと、ハシュリム。背丈は驚くほどに高いのだが、物凄く痩せている。刺々しい表情を常に崩さず、銀縁の眼鏡が更に神経質そうに彼を見せている。茶色の髪に、同じ色の瞳。

この2人は、全く以て対照的なのである。

ウラヌスは、少々強引ともとれる作戦を好み、一度の作戦で大きな利を得ることを大事とする。ハシュリムはその逆で、慎重過ぎるほど慎重に事を進めて長期作戦で物事を解決するのを好む。どちらも一長一短であり、その丁度中間的な判断が出来るレピュスが入る事で初めて議論が成り立つのであった。

「まあ、2人の話はおいといて。アンフィスは戦闘部門に一任だから」

「ミュリエル唯一の生き残り、ですか。随分と運が良かったんです

ねえ」

ウラヌスにレピュスは頷く。先日の光景を思い出すと、まだ胃の辺りがむかついてくる。

「文化系がああいう所に行くものじゃないってのが良く判ったよ」

レピュスは溜息を吐くと、狭い作戦室の奥に進んで書類の山をかき分け、コーヒーメーカーを発掘すると電源を入れた。美味くもなんともないインスタントコーヒーを手に、デスクに着くと取り敢えず彼らが今、一番頭を悩ませている問題について考え始めた。

同盟軍が今、抱えている一番の問題は馬鹿らしい事にセデとの戦いではない。内部対立……つまり、軍部と政治府の対立なのである。ハシュリムはウラヌスやノゴロスを好戦的と評するが、政治府の連中に比べればまだまだずっと慎重派である事は間違いない。政治府は、一切戦場に関与しない。物流の管理、同盟都市の政治的統制、そして彼らが今、一番精を出しているのが同盟軍のトップを奪い取る事なのだから笑うしかない。いつでも、戦争をしたがるのは……特攻が美学と信じているのは戦った事の無い者だけだ。何のために作戦室があるかというと、最小限の犠牲で最大限の成果を戦場にて上げるためである。最大限の犠牲を払って、何も得ない戦いを美とするのならば、少なくとも同盟軍の者達は美を求めない。おかしな事に、とんでもない犠牲を払って少数が凱旋した戦いほど指揮官が褒め称えられるものだ。しかし、味方を殺さないというのは、どれだけ大変な事か……。

『特攻だけなら猿でも出来る』

という好戦派への悪口が、ここのところ、作戦室での流行り言葉に

なりつつある。

『そもそも、俺達が最終的に求めているのはセデへの勝利なんかじゃないんだ。それを、あのジジイ共、理解してるのか……。セデへの勝利だなんてものは幻想だって事は、子供でも判る。俺達が目的とするのは、１つでも多くの被支配地を解放してそこから戦争を取り払う事なんだ』

その為に武力を以て戦っている事は、恐らく、大きな矛盾であろうという事はレピュスも恐らくウラヌスもハシュリムも……それからフュリーや同盟軍トップのノゴロスでさえも自覚しているだろう。

だが、彼らは戦うのだ。

ひょっとしたら、人類というものは戦う以外に何かを解決する手段を持たぬのかもしれない。昔も今も、そして、これからも……。

「レピュス室長」

さっき入ってきた、作戦室の下の部署である通信室の者が持ってきた資料を見てハシュリムは明らかに不快そうな声でレピュスを呼んだ。

「どうした？　政治府のジジイ共からラブレターでも来たか？」

冗談のつもりでレピュスは言った。ところが、苦笑したハシュリムは、頷いた。

「明日の午後7時から会食の誘いです。室長と、俺と、ウラヌスが指名されています。呼び出し人は、ジルギンムス評議長、アルベルト評議長補佐、ザインベッグ国防長、ワシュリンゲル都市公安委員長」

レピュスは、危うくコーヒーを吐き出すところだった。
何とか飲み込んでから、ハシュリムを鏡で映したような不快そうな顔になる。

「とうとう直接来たか」

「やはり、僕等にノゴロス殿を説得させようという意図でしょうか」

「十中十、そうだな。
だがまあ、俺達はノゴロスさんを売る気はない。そうだろ？」

2人は、珍しくぴったりと息を合わせて頷いた。

「まあ、心配する事は無いさ。連中が持ってるのは、今はなき生まれ故郷でしか意味を成さない旧地位と、今でも一応は効力を発揮する権力だけだ。
適当に煙に巻いてやろう」

「……弱みくらい握らなくてよいのですか」

ハシュリムが言うと、レピュスは落ち着いてコーヒーを飲んでから答えた。

「余り、こちらを利口に見せるもんじゃない。能力の差は、こういう場では敵意に変わる。

今はまだ、対立間際という段階であって敵意は存在しない。相手がいなければ楽なのにという漠然とした望みだけだ。敵として掛かる日はまあ、来るだろうが……まだ、その時じゃない。せいぜい、話の通じぬ無能者を3人仲良く装おうじゃないか」

ウラヌスが苦笑した。

「ほんとに22歳ですか？」

「なったばかりだよ」

「この件は、ノゴロス殿に？」

ハシュリムにレピュスは頷いた。

「伝える。あの人の悩みの種に水をやって肥料まで与えるような事はしたくないが、これを連絡しないのはちょっとしたルール違反。後が面倒だ。

悪いウラヌス、行ってきてくれるか」

「判りました」

ウラヌスはハシュリムから受け取った、ご大層な招待状をやれやれと首を振りながら見直して、部屋を出た。

「ハシュリム」

レピュスはウラヌスの背中を見送ると、ふと言った。

「本当に、俺達の戦いは必要なんだろうか」

「……必要、不必要で言えば、不必要でしょう」

ハシュリムは一切、歯に衣を着せない。

「しかし、我々はそれを求め、それに依存してしまった。戦争中毒とでも言いましょうか？」

「言い得て妙、だな。
そうだ……俺達は甘い夢ばかり見せるくせに、その実、身体を蝕む毒に魅せられてしまったんだ」

「誰でもそうでしょう。戦いを始めたその瞬間から、敗北を考えている人間はまずいない。そんな人間がいるならば、戦いは起きない。どんなに確率が低くとも、もしかしたらの勝利に過剰に期待して無用な賭け事を行う。それが戦争ですよ」

レピュスは、少し驚いたようにハシュリムを見た。
この男は、確かに常に慎重論を唱えるところがあるが決して戦嫌いではないと思っていたのだ。

「辞めたいと思うか？」

興味半分でレピュスが尋ねると、ハシュリムは小さく笑った。

「辞められるのは、強制的に参加させられた者だけですよ。どんな場合においてもね。
俺は、自分をここで役立てたいと思って、ここに来たのですから。

辞めるなど、今更」

「それも、その通りだな。
いや、１つだけ反論しておくよ、今後の為に」

「はい？」

「辞めたかったら、辞めろ。
俺も、辞めたくなったら辞めるから」

ハシュリムは、思わず噴き出した。

「室長は、辞めたいわけですか」

「言った通り、辞めたくなる可能性が極めて高いが、今はまだその気にはなってない」

「その気になったら？」

「ウラヌスと仲良くしてくれよ」

レピュスは軽く応じて、不味いコーヒーをまた一口飲んだ。

セデ1

セデ王国、上級将軍のアルジェロはセデ王国軍第二部隊の大将である。この軍は、どこを見ても最新鋭の武器と鍛え上げられた武人の並ぶセデ王国軍の中でも最強の名を我がものとして長い。その軍は、現在弱冠２６歳の第一王子カーネリス・ローデルシア直属となっている。

アルジェロは、ミュリエルで行われた先の戦には出ていない。そもそも、第二部隊は、最初にミュリエル軍の主力部隊を撃沈させたのち戦場から手を引いていた。魔獣使いの実験まがいである、戦争というよりも虐殺と呼びたくなる戦いを行ったのは王直属の第一部隊と現在２１歳であるカーネリスの弟に当たる第二王子ハイネス・ローデルシア直属の第三部隊と、その他の後続軍だ。

戦後、父や他の軍の指揮官から笑われようと、蔑まれようと、罵られようと……カーネリスはあれ以上、虐殺する事も虐殺させる事も罪であると思ったのだ。

罪……というのは、些かずれた表現かもしれない。カーネリスはそもそも、この戦争に「大義名分」など幾ら考えようとも見いだせないでいるのだ。彼は父王の命令を受け、采配を振るう度に出会っている。何故、という疑問に……。だから、彼にとっては意味の無い戦争など、唯の殺人であるから罪であるというのは最初から骨身に染みて感じている。だから、ミュリエルの虐殺が始まってから罪の意識が芽生えたのではなく、元々感じていた罪の意識に耐えられなくなった。その馬鹿馬鹿しさに、耐えられなくなったのだ。

「失礼致します」

既に、５０の年を数えた老練の名将アルジェロ。頭髪は軍人らしく、短く刈り込まれておりその色は黒から灰に変わってきている。若き日から戦場に立ってきた彼の顔は黒く日に焼けて厳めしい。だが、その黒い瞳は荒々しさよりも聡明さを感じさせた。また、鍛えられた身体は彼が立場への依存心などとは無縁という事を物語っている。

そんな老将軍は、カーネリスの数少ない理解者の１人である。

カーネリスが臆病なのではなく慎重で冷静、そして聡明な事を知っており、反戦主義なのではなくてこの戦争の無意味さを理解する数少ないセデの人間なのだという事を知っている。これだけの事を、彼の父や弟でさえ知らぬのだ。

「アルジェロか」

窓際に立っていた、第一王子カーネリスは振り返った。恭しく一礼するアルジェロに頷くと、向き直った。

「ご命令の通り、先日の戦闘のデータを取りそろえました」

「済まないな。密偵のような真似をさせた」

「お考えがあっての事なのでしょう」

カーネリスは、微笑んだ。

アルジェロの聞くところに依ると、カーネリスがこの表情を見せるのはどうやら、アルジェロを含めた第二部隊の将軍達を前にした時

だけらしい。

そして、その笑顔は実に魅力的である。容姿端麗、という言葉もカーネリスには足りないと思われる。

鋭い、漆黒の光を持つ双眸は和らぐ事が無くとも十分に人目を引きつける力と、深淵なる美しさを見せる。顎の線や鼻筋は名工が掘ったようである。そんな美しい顔の三方を黒い、瞳と同じ色の髪が飾る。その髪は僅かにくせがあって、揺れる度に波の如く光を反射する。

「アルジェロ」

彼が渡した資料をしばらく眺めていたカーネリスは、忠臣の名を呼んだ。その瞳は、もう温かさとは訣別しており、まるで戦場の指揮官のような鋭さを持っていた。

「奥へ入れ。少し、込み入った話をしよう」

無駄な言葉を嫌うカーネリスが前置きをするという事は、ただならぬ話という事だ。それもまたよく知っているアルジェロは、ただえさえ人並み以上に伸びている背筋を更に伸ばして足を踏み出した。

「疑問に思っていた。ミュリエルとの戦争に果たして、意味が１つでもあったのだろうかと」

「……」

黙ったアルジェロを見て、カーネリスは苦笑した。

「無論、私は意味のある戦争など人類史が始まって以来、１つとしてないと思っているが。
だが、戦争に意味づけをし、正当化する連中はいる。国王とハイネスのように、な」

カーネリスは、自分の将軍達と話す時、国王を父と呼ばず、ハイネスを弟と呼ばない。無論、血の繋がった関係であるが……心は一切、繋がっていないのだ。

「国王陛下もハイネス様も、今回の戦いに意義を見出していらっしゃらなかった……そういう事でしょうか？」

「端的に言えばそうだ。
もっと詳しく言うのならば……あれは、“実証”いや、“実験”だったのではないかと思う。お前の持ってきてくれたデータだが」

カーネリスは資料の中程のページを開いた。

「ドラゴンを召喚した、ルーン・マスターがたかだか１５の子供。
そして、結局制御に失敗して味方共々、本人までもが死亡している。
確証が無いものだから、アルジェロ、お前にも黙っていたのだが……。
セデ国王は、禁忌を犯しているかもしれない」

「まさか……ルーン・マスターの“製造”を」

カーネリスは苦々しく頷いた。

「それが成功し、その効力を“実験”するのにミュリエルを利用したとしか考えられない。そうでなければルーン・マスター動員の必要もなければ、そもそも緒戦で主力軍を打ち破ったのだから降伏勧告をしても良かったものだ。それを、しなかった」

「それは……」

幾ら何でも、疑い過ぎではないか。その言葉がアルジェロの喉からは発せられなかった。主君に異議申し立てする事への躊躇いもあったが、それ以上にアルジェロも殆どカーネリスの説を信じていたのだ。

「それに、これを見ろ」

カーネリスはまた資料のページを繰った。

それは、アルジェロがカーネリスの説を半ば信じた理由である。

「前回、セデ軍にいたルーン・マスターは平均年齢３４．２歳。２６７名。ところがこの戦いから、数値が一気に変動している。平均年齢が２３．６歳、人数は５３５名。

平均年齢が半分以下になり、人数は半分以上となった」

「……子供で、ルーン・マスターを作る実験を行っていた、とお考えなのですか」

「ああ。前回の戦の時、丁度、年齢が達していたのだろう」

アルジェロは空恐ろしい気持ちで、資料を見つめてしまった。

「私は、この国はそろそろ終わりだと思っている」

今や、世界中のどの国家よりも多くの植民地を持ち、とんでもない武力と財力を持つ……世界の頂点ともいえる王国の中心からほんの少しだけ離れた地点にいるカーネリスはそう呟くように言った。

「やはり、技術総監のハゾスが絡んでいるのでしょうか」

アルジェロの問いかけに、カーネリスは数秒考えて、首を横に振った。

「恐らく、王国技術研究所は関与していないだろう。この王城には国王の許可無しには私であろうと立ち入る事の出来ぬ区画が多くある。その中に禁断の研究所を持つくらい不可能ではない」

「……そうですな」

セデ王城は、他国の王城に類を見ない程に広大な敷地面積を持つ。その全てを把握しているのは、国王1人と言われているくらいである。カーネリスの言った通り、国王の許可無しに入れぬ部屋、通れぬ通路は幾つか存在し、その関係者には黙秘義務が課されている。破った場合は無期限の収監、最悪、死が待っている為、この規律を破った者は未だいないようだ。

「調べますか」

「……お前には、余り危険へと踏み込んでもらいたくない。第二部隊に優秀な将校が多くいるのは確かだが、私が全てを話せるのは未だにお前だけだ」

余りにも自然と、絶対的な信頼を示されてアルジェロは反応が出来なくなってしまった。かなり遅れて、深々と低頭する。

「身に余るお言葉を……」

「だが、この件ならばいいだろう。現王制を打破し、私を王位に就かせたい者はかなりいる。王の不祥事を洗い出すという説明で片が付くから若い連中も動かせる」

「して、誰を動かされるので？」

「ヴォルガとベルグ、どちらがいいとお前は思う？」

アルジェロは少し考えて、割ときっぱり答えた。

「ヴォルガでしょう」

カーネリスも、どうやらそう思っていたようで満足げに頷いた。

「何故そう思う」

これはもう、確認である。

「どちらも、若く優秀な将校でありますが……。ベルグは白兵戦を得意とするような、権謀術数と無縁の男です。また、性格上……文句は言わないにしても、裏方の仕事を好まないはずです。

その点、ヴォルガは寧ろ裏方に向いている……。事務監督や、後方勤務の経験も多く知恵が回る男です。戦いを目的とせぬ場面ではヴォルガの方が役立つでしょう」

「ああ。次いでに言えば、ベルグは少し迂闊だ」

カーネリスは微笑んだ。

アルジェロの見立てであるが、カーネリスは若い将校の中で特にベルグを好いているようだ。先程の悪口も、どこか親しみの込められたものだった。彼は、自分のこの立ち位置を代わる者が必要となれば、迷わずベルグを推薦する積もりでいる。

「よし、アルジェロ、下がってくれていい。外に控えている小姓の誰かに、ヴォルガを呼ぶように命じてくれ」

「かしこまりました」

敬礼し、アルジェロは部屋を後にした。

同盟4

レピュス、ウラヌス、ハシュリムは普段着から軍服に着替えていた。本日、“政治府のジジイ共”との会談が行われる。実際には会食に誘われたというだけだが、その動機が友好的なものであるとはハナから思っていない3人である。また、この事を聞いた同盟軍代表のノゴロスも苦い顔をしたという。

3人が向かうのは、ジルギンムス評議長の政治府におけるプライベートルームである。

広いながらも、飾り気が少なく質素で剛毅な印象を持つ同盟軍本部に比べるとどちらが政治用の建物で、政治家達がどのような性格かは一目瞭然である。広さこそ、必要ないので同盟軍本部の半分程度だがあちこちに噴水や色とりどりの花壇が置かれる絢爛な庭。建物は半円状であり、入り口には初代評議長の銅像が置かれている。また、金装飾だらけ。中に入ると紅いカーペットが出迎える。左右に目をやると歴代評議長の似顔絵が飾られており、重々しい会談が建物の中央に位置する1階会議室へ繋がっている。

「相変わらず、維持費だけでも予算の無駄遣いですねー。1トルオン（平方メートル）に一体、幾ら家賃代が掛かると思ってるんでしょ」

ウラヌスがずけずけと呟くが、レピュスとハシュリムも同感であった。

彼らにこの建物の改築が任されたとしたら……規模は一気に3分の1以下になるだろう。実際、それくらいしか必要ではない。

取り敢えず、彼らは今日その大会議室には用がないので左右に伸びる階段のうち左側を選んで上る。ジルギンムス評議長のプライベートルームは建物左側の3階奥に位置している。

遠くって面倒くさい、が3人の共通意識である。

豪奢な飾りのついたドアの前に、きちっとした身なりの文官が立っていた。レピュスも知っている者で、ジルギンムスの部下だ。

「レピュス、ウラヌス、ハシュリムだ」

億劫そうに招待状を見せると、几帳面に確認した男は大仰に低頭した。

「お待ちしておりました。中へどうぞ」

開けられたドアの中へ進むと、レピュスは0．1クロン（秒）で愛想笑いを見事製造した。

「お久し振りです。御招待、感謝しますジルギンムス殿」

「いえ、こちらこそ同盟軍作戦室のトップを呼びつけるような真似をして申し訳なかったですね」

口は笑っているが目は笑っていない、ジルギンムス評議長。まだ、中年となったばかりの男で、背は高く見栄えは悪くない。物腰は優雅であって、第一印象で彼を嫌う者はあまりいないと思われる。

「ささっ、こちらへ」

多分、唯一、まともな笑みを浮かべているのがアルベルト評議長補佐。ジルギンムスよりはかなり年上の彼だが一から十までジルギンムスの言いなりになっているとレピュス達は判断している。灰がかった髪色の、ふっくらした顔立ちの中年男。

レピュス達はとりあえず礼を言いながら席に着く。テーブルは、円卓であった。円卓のそもそもの目的は、席次に目が行かないようにする事で、集まった者達の身分を曖昧化する事になるのだが……。今回はその目的が十分に果たされているとは思えない。

席順はこうなった。

扉から入って正面に顔が見える位置にジルギンムス。その右手にアルベルト、隣にウラヌス、ハシュリムが並んでザインベック国防長、ワシュリンゲル都市公安委員長、そしてジルギンムスの左手にレピュスという形。ジルギンムスとザインベックのアイコンタクトは容易である。レピュスが仲間2人と離されているというのも、どこかしら悪意を感じる。

「まあ、あまり気を張らないでいただきたい。共に食事をというだけですからな」

ザインベックがそう言う。この中では最高齢の国防長。レピュスに言わせれば、この役職そのものが矛盾と間違いの塊だ。そもそも、ここは同盟都市であって同盟国ではない。どうせ、つくるならば都市防衛長だろうに。更に、都市の防衛なら同盟軍で十分なのである。政治府の者達が口を出すと、色々と話がこじれるだけなのに。つまり、この役職は政治府の隙さえあれば軍の権限を奪ってやろうとい

う意図、自分達の都市の力を過大評価する勘違いから生まれたレピュスの何よりも嫌いな役職である。

ついでに言ってしまえば、レピュスはザインベックの性格と容姿も嫌いである。役職が服を着たような性格で、いつでも嫌らしく軍の弱みを握ろうとしている。それが顔に出ていて、更に実力に見合わない自信という、似合わぬ化粧が施されているから堪ったものではない。同盟軍の隠密・諜報部隊の司令官ヴァンと画策して、暗殺してやろうかと顔を見る度に思う。今のところ、思うだけだが。

その隣のワシュリンゲルについては、もはやレピュス達の眼中にない。今も、早く乾杯が行われないかうずうずしている食欲の塊である。しかも好色で同盟軍の女性の評判は政治府の誰よりも悪い。フュリーが盛大に頬を引っぱたいたという伝説は有名だ。……真偽の程は判らないが。更には男性の方にも興味があるらしく、今もウラヌスと食事を交互に見つめている。また、それらの趣味を持つ者の例外ではなく、浪費家であって金銭的汚職の中心人物だ。これは、食事に毒を仕込めば簡単に殺せるのではないかとレピュスはいつでも考える。今のところ、考えるだけだが。

同盟5

和やかという雰囲気を作るために偽装的な笑みを浮かべながら、同盟軍作戦室の者達に明るく話しかけるジルギンムス。時折、意見を求められると丁寧に答えるアルベルト。得意げに主戦論を語るザインベック、食事とウラヌスに夢中なワシュリンゲル……。レピュスは同席していながら、それらを俯瞰しているような気分であった。ハシュリムはうんざりして食が細いくせに、集中して食事している振りを始めたしウラヌスは気晴らしのようにワシュリンゲルに悪魔的な笑みを放って暇つぶししている。期待させておいて、高いところから突き落としてやろうという魂胆だろう。いやはや、恐ろしい男だとレピュスは他人事として思うのだった。

食事が大方済むと、ザインベックが思わせぶりな様子でレピュスを見た。

「話は変わりますが」

「はい？」

「最近また、軍部は消極的になってきましたなあ。これではセデに足下を見られてしまうのではないですかな？」

レピュスは、腹心2人を見て水を口に含んだ。「任せて、黙っておけ」という合図である。

「そうでしょうか。ザインベック殿はでは、どうすべきと思われるのか……是非、お聞かせ願います」

あくまでも友好的笑みで言うレピュス。ウラヌスとハシュリムは顔を見合わせて、２２歳になったばかりの作戦室トップの老獪っぷりに感心した。

「率直に言えば、このままではいかんでしょう」

得意そうに話すザインベック。

「セデから離れ、ビリアスの影に隠れたこの地からもっと積極的に出て行くべきですな。我らの救いを待つ、セデ植民地は幾らでもあり、多くの戦いは多くの力を身につける事に繋がるはずです。ノゴロス殿は、同盟軍を飼い殺しするつもりとさえ、思えてしまいますな……おっと、言葉が過ぎましたか。
戦わなければ判らぬ事もあるでしょうし、戦わないのならば軍は要らないです。同盟軍というものを作った時点で、戦いを覚悟しているはずなのにどうしてまた、この地に引きこもっているのか判りませんな。先日のミュリエル戦役も、何故もっと早くに出て行かなかったのか。レピュス室長に、丁度お尋ねしようと考えていたのです。何も、戦場跡に残り物を探すハイエナのように向かわなくとも、もう少し早く向かっていれば、更に多くを救えたのではないですかな？」

長弁舌ご苦労様、というのがレピュスの心情であった。

「そうだ、ザインベック殿の言うとおりだ！　何故、早期出兵をしなかったのだ！」

と叫びたがるように頷いているジルギンムスの方も見てからレピュスは国防長を見た。

「なるほど、ザインベック殿の仰る通りですね。軍部は今回……少し、消極的過ぎたかもしれません。しかし、ノゴロス殿は無駄な犠牲を嫌うのです。それは、俺も同じです。セデの戦力を前にすれば……例えば、我らが同盟都市の全軍を向けたとて、敵うはずもありません」

「戦ってみなければ判らないではないか」

「しかしですね、国防長」

いくらでも、計算上の反駁はしようがあるのだがレピュスは敢えて困った顔を作った。

「では、質問を変えさせていただきます、レピュス室長」

「はあ」

すっかり、情けない調子のレピュスを見て、勢いづく政治府の者達。それら、まんまと騙された者達を見て、失笑を抑えるウラヌス、ハシュリム。

「室長は、今回の出兵にどのような案を出されたので？　ノゴロス殿の意向は、この際、抜きにして」

彼らは、レピュスが敵か味方か計っているというわけだ。

これに答えをくれてやるレピュスではない。

「案、といいましても。我ら、作戦室の任務は軍の意向を決める事

ではなく、決められた動きをいかに安全、効率的に進めるか考える事ですので。
また、今回は軍を動かしませんでしたので、俺は殆ど関わっていません」

「随分と、軽視されているらしいですな」

ジルギンムスが憐れむように、感じ入るように言うので見え透いた演技にレピュスは顔を背けた。笑いそうだ。それを堪えて、苦笑に変化させてジルギンムスに向けた。

『そうなんですよ。でも、とても口に出しては言えません』

と相手は解釈した事をレピュスは予想した。

ちなみに、ミュリエルの件については嘘である。ミュリエルに救援を向かわせようというノゴロスを、むしろ作戦室の3人が必死に止めたのだった。結果、正解であったとレピュスは思っているしノゴロスにも止めた事を感謝された。あの戦場に兵を向けていたら……。あの、凄惨な死体の山に同盟軍の同じような死体も重なっていたと思われる。そして、重ねてになるが、セデと戦う事が彼らの目的ではない。セデの油断や隙を突いて、植民地を解放、出来れば戦わないのが一番なのだ。彼らは、それを求めているのだ。

「それにしても」

レピュスは全く、他意の無さそうな口調で話題を変更した。

「どうしてまた、今日のような事を？　珍しいですね」

一瞬、ジルギンムスは黙って油断ならないものを見るような目をレピュスに向けたが、その表情を見て首を横に振った。この問いに対する反応で、自分達の心中を計ろう……などという策士の目には見えなかった。

これは、巧妙に騙されたのであるが。

「おや、水くさい事を言いますなあ。我々が同盟軍との友好をないがしろにしているとでもお思いですか？　我々は持ちつ持たれつとでも言いましょうか。だから意思や手段を共通理解の元に置く事は大切だと考えるのですがな」

「ああ、そういう事ですか。
てっきり、皆さんに叱られでもするのかとびくびくしていました」

レピュスは軽やかに笑ってみせた。

だが、裏ではジルギンムスの言葉の一説を拾い上げていた。

『手段の共有と解釈していいだろう。つまり、軍政統一。やはりそれが狙いか。
そこで、一見武官より文官に近く見える位置にいる作戦室の者から抱き込もうとしているんだな。残念でした』

彼らは揃って、ノゴロス同盟軍総帥の忠実な部下であるし、参謀とは武力で戦わない戦士であるという認識を持っていた。……言ってしまえば、政治もそうであるはずなのだが、生憎同盟都市の政治家

は政治を金儲け・権力行使と保護の手段としか考えていないようである。

『今日は敵意の確認までにしておくかな』

レピュスは1人で決め込むと、もう一度水に口を付けた。「撤収」の合図。

「そういえば室長」

ウラヌスが今思い出した、とでも言いたげな調子で口を開いた。

「ん？」

「そろそろ戻らないといけませんよ。ほら、彼の配属についての話し合いがあるじゃないですか」

「ああ、いけない」

ハシュリムから見れば、非常に白々しいやり取りなのだが、この2人は作戦室きっての名優である。不自然さはどこにもない。

「申し訳ありません。先に言っておかなければならなかったですね。本日はまだ、仕事が残っていまして。この辺りで戻らせていただきます」

「ああ、そうか。それは残念」

こちらは見るからに白々しいジルギンムス。

「今度、ごゆっくり出来るといいですね」

アルベルトはやはり、どこか抜けているようで、本気でのんびり口調である。

「軍の動きについては、またいずれお話しさせていただきたいですな」

これはザインベック。名優の室長は、笑顔で是非にと答えて立ち上がる。

たどたどしく、ウラヌスに握手を求めようとするワシュリンゲルをウラヌスは華麗に気付かぬふりでスルーして立ち上がった。ハシュリムも続く。

「では、またの機会に。お招きありがとうございました」

セデ2

カーネリスの部屋には、アルジェロに代わって若い将軍がやってきていた。呼び出された、ヴォルグ将軍である。まだ27、カーネリスより1つ年上の彼は少し変わった格好をしている。首から下はきっちりとしたセデ軍の、黒地に銀色の装飾が入った軍服を着ているのだが……首から上で外に見えるパーツがかなり少ない。鼻から首までを黒い布で覆っていて、灰色の瞳のうち、左側は銀色の長い前髪で隠している。唯一の特徴ともいえる右目は、相当に鋭い。眉が綺麗に細く、整えられているため侍女はヴォルグ女説――顔を隠しているのは性別を隠すため――を囁いているが、事実無根である。

「将軍であるお前に、隠密任務など、させたくはないのだが。やってくれるな？」

「仰せのままに」

深々と低頭するヴォルグ。布の所為でくぐもっているが、中性的な声だ。

「もしも、問いかけられたら全て私の命令であり、お前は何も知らない事を装え。私がいくらでも誤魔化そう」

「カーネリス様のお手を煩わせる事の無いよう、最大限の努力を致します」

カーネリスは答えを聞いて小さく笑んだ。

ヴォルグが、彼の言うとおり自分の手を煩わせる事をしないというのはカーネリスも殆ど確信していた。アルジェロと話した通り、ヴォルガは非常に頭が良いし、慎重な人物だ。「失敗」や「焦り」という言葉に無縁な人物と言って過言でない。それだけ、カーネリスは彼を信頼している。

もしも、調査の結果、彼とアルジェロの抱いた懸念……セデ王城の秘密実験室の存在、そしてそこでのルーン・マスター製造が明らかになったとしたら。もう、動くしかないし、そうなる予感を持っていた。カーネリスは実際的な軍人気質のところがあり、滅多に根拠の無い予感や想定で動きはしないが……今回ばかりは自分の直感を信じていた。口には出さずとも、アルジェロが同意していたというのも判った。

動く、という事はつまり現国王を排除して王権を手に入れるという事だ。そして、まずは現在、暗黙の了解として互いに干渉していないビリアスと明確な平和条約を結ぶ。それから、同盟都市の者達との和解に努める必要がある。混乱を招かぬよう、慎重に植民地解放を始めなければならないし……頭を悩ませる事は山ほどある。出来る事なら、国王など一生やりたくない職業である。生まれ変わり、など本気で信じてはいないが、生まれ変わるなら次は平和な国の農民がいい。

「肝心なのが、ファーレーンだな」

独りごちる。

ファーレーンと深く関わっているわけではないが、あの都市には2

種類の考え方が存在する事は薄々理解している。１つは、戦争を食い物にしており、積極的に戦争を奨励さえする者達。もう１つが、戦争を食い物にしている自分達にどこかしらの嫌悪感を持つ者達。ファーレーンを味方に引き入れる為には、まず後者を捜して抱き込む事だ。そして、前者よりも優位な立場にいてもらわなければならない。

カーネリスの手元には、１つの名刺がある。

『シャンドル武器店　店主リザ』

セデの将校の武器は殆どが彼女の作品である。また、今や世界の武器屋の半分以上がこの武器屋から技術を買い取って商品を生産している名門中の名門店。ファーレーンでも一目置かれ、市長に対しても強い発言権、影響力を持っていると聞く。

一度、この店の者達に会う必要がありそうだった。

ファーレーンの商売人達は、商売の妨げになるものに対して容赦をしないし、自分達の権益を守る為ならどんな謀略でも買収でもやってのける。ファーレーンの者達にとって、他国の政治家の買収は罪などではなく必要ならば、当たり前の行為。金で買えるもので、買う価値のあるものは全て買うのがファーレーンの政治だ。

このまま、ファーレーンを放っておけばセデがこの侵略を止めようとした時、彼らは何らかの働きかけをしてくるだろう。予測出来る障害は、取り払っておくに越した事はないというのがカーネリスの考えだ。

予定では、一週間後にリザの使い……数少ない従業員が武器の配送にやってくる。馬を使って、陸路での移動だから確実性は低いが少

なくともその前後である。通常ならば、セデ軍の武器管理部門の者が荷を受け取り、1日か2日、簡単なもてなしをするだけだが。カーネリスがそこへ行って、戸惑う者はいても追い返す者はいない。

小姓を呼んだ。

「如何なさいましたでしょうか」

「シャンドル武器店の者が、今日より一週間前後でここへ来るはずだ。到着したら知らせてくれ」

「承知致しました」

短い間に、身長が数センチ伸びるのではないかという程に背筋を正していた小姓の少年。恐らく、一週間と言われたものの、万が一の場合のため明日より終始城門を気にする羽目になっただろう。

同盟6

作戦室の者達は、戦いが無いからといって仕事がないわけではない。市長も兼任するノゴロスの手が回らない軍部の統制を行うし、政治家達とのやり取りについてノゴロスと話し合う事も多い。また、暗部……情報収集などを専門に行う戦士達の部隊は、同盟軍戦闘部隊ではなく作戦室の直下におかれているから暗部の長との小会議も毎日のように行われる。

本日、その小会議にはウラヌスが出ていた。取り敢えず、レピュスとハシュリムに仕事はないのだが……そうなるといつでも政治府の“ジジイ共”の悪口の言い合いとなる。

「そもそも、国防委員長という名がちゃんちゃらおかしい。ここは同盟都市であって、同盟国ではないのに……。その点を判っているのか気になるね」

レピュスの言葉に、ハシュリムは肩をすくめる。

「聞いては気の毒ですよ。
彼らには一日先を見るだけの視力があろうとも、過去と現実、それから己達が原因となって生じる結果を見る視力が無いのですから」

大いに頷きつつ、レピュスはコーヒーを一口のんで溜息をついた。

「こういう発想が積み重なって、セデ打倒だなんて愚考が生まれると思うと悲しくなるね」

深刻そうに言った。台詞の後半は再度でた溜息と共に、だった。

「しかし、奴らの主張はある一点については言い返せぬほどにまっとうだ。
判るか？」

ハシュリムは悔しげに頷いた。
“ジジイ共”に指摘されるまでもなく、彼らは最初から――同盟都市建設時から、この都市が抱く矛盾に気付いている。

「政治のトップ――要するに市長と、軍のトップ――元帥を同一人物が兼ねている。他に誰もいないからという言い訳も出来るが、指摘の根拠はもっと強い」

「ここは帝国でも王国でもなく、自由都市だということですね」

「そう。ノゴロスさんを市長の座から引きずり下ろして連中の誰か……恐らく“国防”委員長辺りがその座につきたいという野心が根底にあるのはまあ、明らかだが。証明が出来ない」

「盗聴でもしますか」

レピュスはその魅力的な提案に傾きかけた頭を元に戻した。

「それは、いけない」

「……ご説明願えますか」

「1つは、俺は少なくとも目的を手段を正当化するための免罪符にはしたくないということだ。

もう1つはこちらから動くべきではないということ。
放っておけば、どうせ連中はボロを出す。それまで適度に牽制しつつ良い子で待っていればいい。向こうに、こちらを突く理由を与えてはいけない。
俺の独断といったところで、どうせ綿より軽い口をペラペラと動かしてノゴロスさんを落とそうとする。それじゃあ駄目だ」

そこで、内線が鳴った。

「噂の市長からだ」

レピュスは受話器を取り、いくらか話を聞くと――立ち上がった。

「ハシュリム、ウラヌスはどこだっけ？」

「隠密部隊へ、小会議の為に行っていますが」

「そうだ。じゃあ、すぐウラヌスを連れて軍司令部へ。俺は先に行ってる」

「何があったのです？」

ハシュリムも立ち上がって、大体の見当をつけつつ尋ねた。

「先日、奪取したルネール地区にセデ軍が兵を向けようとしているらしい。戦いだ」

「判りました」

ハシュリムはその背中を見送り、ウラヌスを呼びに走りながら首を振りたくなった。やれやれ……と。

彼らの信ずる作戦室のトップは戦を嫌っている。それはもう、戦で新郎と新生児と新居を同時に奪われた新婦の如く嫌っている。……それなのに、彼は戦略・戦術・用兵について並はずれた知識を持ち、それを活かす喜びを知っている。本人はきっと、厭そうに否定するだろうが室長の

『戦いだ』

という言葉は――どう考えても、特殊な明るさをはらんでいた。それが若さ故と片付けられるのか、戦を愛するのが本来の彼の性質なのかという穿った見方となるのかは判らないが……。ハシュリムは前者で片が付く事を望んでいる。

ファーレーン2

セデ王城に近付く黒い馬と、小型の馬車。

「通行証を」

「シャンドル武器店の者。私はルシエル、後ろのはアルフィア」

そう答え、黒い馬に乗っていた女はファーレーン・セデ間の通行証を衛兵に見せた。ルシエルを見て、目があった衛兵達は放心しかけたが渡された通行証を確認して返却すると開門した。

――――その時、カーネリスの小姓が大慌てで、主の部屋へ駆けて行ったのは彼らは知らぬ事だ。

「積み荷は全て、注文品だ。どこへ運べばいい？」

本来なら、王城前の警備を任されるキャリアを持つセデ兵に対して一介の商売人がこのような口の利き方をしたならば、渋い顔をされるが、そのルシエルにその態度が非常に板に付いていたし彼女がとんでもない――神々しいまでの――美貌の持ち主だったから誰もそんな事に構いはしなかった。

「第二兵舎が最も武器庫に近い。取り敢えず、そこに注文品を下ろしてもらいたい。その後、簡単にだが休んでもらえるよう準備している」

「判った。案内はいい。覚えてる」

ルシエルはそう言って、アルフィアに

「この前と同じだ」

と声を掛けた。衛兵達は、アルフィアを見て道中に体調を崩したのかと思ったが彼の顔色は常にこんなものである。白いというより青い。

第二兵舎の前に着くと、ルシエルとアルフィアにも馴染みがある人物が近寄ってきた。

「よう」

軽く右手を上げて挨拶したのは、兵の格好をしているのに少しも兵に見えない少年騎士。黒い髪は長めで散らばり放題、身体は騎士服の上からでも判るほどがりがりに痩せている。瞳は大きく、顔を見るとまるで少女のようでさえある。こんな彼はしかし、カーネリス直属第二部隊にて将軍職を務める。名をウインディという。

「相変わらず美人だね～ルシエル。で、アルフィアは相変わらず病人みてーなのな」

「将軍がわざわざ注文品確認に来たのか」

ルシエルが返すと、ウインディは肩をすくめる。

「馬鹿ばっかだからさ！　下っ端にやらせると時間掛かってしゃあないの。それにあんたらも俺の方がいいでしょー？　畏まらなくていいし、可愛いし」

「どこが可愛いんだ」

ルシエルがしらけた調子で言うと、ウインディは不満そうに唇を尖らせる。

「全部」

実は、ウインディはたった数分前にカーネリスに命令されてここに来た。時間短縮という意味も確かにあるが、カーネリスがファーレーンと接触を試みているという事を彼は将軍達以外にはまだ知られない方が良いと考えたのだ。

「それでさ」

ウインディは検品しつつ声を潜め、偉そうに2人を指で招いた。ルシエルとアルフィアが首を傾げつつ従うと、彼は小声で言う。

「俺の唯一の主が、お前らと話したいそうだよ」

「……唯一の主というと」

国王でない事は、ルシエルとアルフィアにさえ容易に想像がついた。彼とルシエル達は、会うのは何度目かで、気安く喋る仲にまでなっているのだが国王については悪口しか聞いたことがないのだ。

「第二王子様さ。ただし、会いに行くと色んな奴に見付かる可能性

があるから今晩、あの人が自分で来る。多分、お前らはルーシャの間に泊まってくようにされるから。各寝室に引きこもらないで、客間で待っててよ」

「……判った。しかし、何の用なんだ」

アルフィアが尋ねるとウインディは口の前に指を立てた。

「俺からはここまで。生憎、誰が聞いてるか判らん御時世だからな」

「忙しく探り合いをしてるのか。王城も大変だな」

ルシエルが気が無さそうに言うと、ウインディは

「ほんと、やんなっちゃうよ」

と肩をすくめた。

その夜、ルシエルとアルフィアは用意された中々に豪勢な夕食を終えてからもウインディの言った通り客間で時間を過ごしていた。アルフィアはともかく酒豪のルシエルは、王子が会いに来るらしいからといって酒を控えたりはしない。

「そろそろ真夜中か」

ビンを何本かあけつつ、全く平然とした様子のルシエルが問いかけるとアルフィアは頷いた。

「人目を憚っているという。来るならもう少し後だろう」

「……何の話だと思う」

「さあな。カーネリス第二王子の戦績なら知っているが、為人は全く判らないから。王や兄弟に知られる事を警戒しているとなると、平和的挨拶とは思えない」

ルシエルは頷いた。

「謀の類(はかりごと)か」

「そう思う」

＊

真夜中をかなり過ぎた頃、ひっそりと王城を歩く姿がある。闇に溶け込むような黒い簡易な鎧は第二軍の城内警備用の格好である。しかし、これは警備担当兵ではなかった。

その人物は足音さえ立てぬ身のこなしで、商人など中流階級の客人を案内するルーシャの間に忍び寄った。ノックもせずにそっと扉を開く。

中の者達は心得ていたように、一切の驚きを見せずに扉が開くのを待っていた。

＊

ルシエルとアルフィアは、誰かが入ってきた事に驚きはしなかっ

たがその姿に少し目を驚かせた。王子というから、どんな立派な格好をしているかと思えば。下級兵士のもののような、簡易な鎧に身を包んでいる。だが、それでいて彼がその持って生まれた高貴な雰囲気を消す事は不可能のようだった。

その者は言葉を発さずに、兜を外した。さらさらと、水が流れるかのようにこぼれ落ちる黒髪。現れた端正な顔は、神々しいと表現して差し支無かった。

だが、それに目を奪われるルシエルとアルフィアではなかった。アルフィアは何を考えているか相手に読ませぬような感情の無い紅い瞳でその姿を見据え、ルシエルの方は深海の瞳を警戒に染める。金になびいても権力に屈しないファーレーンの代表者としてあるべき姿である。

「こんな遅くに申し訳ない。私がカーネリスだ」

流石の2人もカーネリスの、このあまりにも簡潔な挨拶には少し戸惑った。王族、貴族なら幾度となく相手にしてきたが、よくそこまで覚えられるなと感心するほどの長い挨拶が常だったのだが。しかも、謝罪から入っているところがファーレーンの2人に好感を抱かせた。……これが計算の内ならば素晴らしい策士だと思うアルフィアもいたが。

「座ってもいいだろうか」

「どうぞ」

にこりともしないルシエルに、女性の色目に慣れている美貌の王子は逆に興味を持ったらしくそちらを改めてよく見てから席についた。

「あまり格式張らずに話したいのだが、いいだろうか？」

「その方が我々としても気が楽です。大した学も無い商売人ですので」

アルフィアが答えると、カーネリスは小さく笑った。幻惑的な笑みである。

「あなた達が馬鹿でないと、判らないほど私は世間知らずではないよ。商人というのは、ある意味で貴族や軍人より余程賢い」

それから一拍置き、話を進める。

「ファーレーンの事を知りたいと思っている。政治・経済の事情ではなく思想的な面での事を」

2人は、意外な思いを隠しきれず目を合わせてしまった。カーネリスはそれを見てまた艶やかに微笑む。

「どうか、警戒しないで欲しい。

……まあ、あなた達は賢く慎重な人達のようだから先にこちらの手の内を明かそうか」

ルシエルとアルフィアは、時に何よりも有益な武器となる沈黙を選ぶと決めた。

「私は、これから先、セデに必要なのはいかにしてファーレーンと

上手くやっていくか、という事だと思っている。
今回もそうしてもらったように、セデ軍の武力を支えるのはあなた達が売ってくれる武器だ。どんなに人を鍛えようと、軍律を固めようと……脆弱な武器では戦えない。強固な防具と、相手のそれを打ち破る武具があって初めて強い軍は出来上がる」

アルフィアはそっと沈黙を破った。

「セデは……いや、あなた様はそんなファーレーンを敵に回すかもしれぬ事をするおつもりなのですか？」

カーネリスは驚いた“振り”をした。無論、アルフィアは見抜いている。

「その鋭い目は嘘ではないらしい」

降参、という風にまた微笑む。

話の進め方を見る限り、この王子は相当な外交上手である。商人でも成功できるタイプだとルシエルはこっそり考えた。

「あなたの言った通り、セデと私の考えは少しずれている。ここからの話は、ここだけに留めてもらいたい」

その瞬間……先程まで、殆どカーネリスと対等であったルシエルとアルフィアの背筋は凍った。無条件に、頭というよりもっと原始的な……動物としての本能が彼らにカーネリスに逆らってはいけないという警告を与えた。

「私はいわゆる、反戦思想を持っている。

率直に聞こう。ファーレーンは……あなた達はどうだろうか」

今度はルシエルが口を開いた。

「セデと同じですよ」

「ほう？」

「二種類というわけです。自分達に利益を与えてくれる戦を奨励する者達と、戦争を食い物にする自分達を嫌悪する者達」

「あなた達の立ち位置はどうなのかな」

カーネリスはうっとりするような笑みから、今までで一番人間めいた笑みに変えてルシエルを見た。これが「アルジェロにしか見せない」と評判の笑みである事は当然、ルシエルは知らないしカーネリスも気付いていない。

「後者かな」

まさに自虐的に言い放ち、アルフィアと目を合わせた。アルフィアも頷く。

「だが、私達だって子供（ガキ）じゃないんで。戦争は嫌なんて我が儘を言っていたら自分達が食えなくなる事くらい、ちゃんと判ってます。……誰も苦しまない世界が正義だとしたら、正義なんて存在しないんですってね」

今度は目を丸くしたカーネリスである。

一介の商売人……と舐めてかかっていた訳ではないのだろうが、こんな事を武器職人が言うとは思っていなかったのだろう。

同盟7

レピュスが入ったのは、同盟軍最高責任者にして同盟市市長、ノゴロスの執務室である。平生は片付いているこの部屋も、戦時となると急に資料やらでごった返すが今もそうなりかけていた。そんなデスクの向こうに大柄な……というより“巨大な”という表現がしっくりくる男が座っている。浅黒い肌で、筋骨隆々といった体つき。神話に登場する大戦士のような風貌を持つノゴロスに、レピュスは丁寧な一礼をした。

「お待たせしました」

「ああ、適当に座ってくれ。ハシュリムとウラヌスは」

声も低くて、大きい。腹の底にじんと響くような声だ。一言発しただけで、指導者としての風格を見せつける事が出来るような。

「暗部との小会議に出ていたウラヌスをハシュリムが呼びに行っています。もうすぐでしょう」

「ふむ。それじゃあ待つか。コーヒーでも飲むか？」

と言って、自ら立って人数分のコーヒーを用意するところがこの最高責任者が好かれる要因の１つだ。

「すみません、俺がやりますって」

礼儀上、立ち上がってそう言ったレピュスも返事は予想が出来てい

る。

「まあ座っとけ！　自ら使われる奴に構うこたあねえ」

だが、一言だけ。

「これじゃあ、どっちが市長か判らんじゃないですか」

「なっはっは！　いいんだよ、市長も市民だ」

レピュスは聞きながら頬が綻ぶのを抑えられなかった。だから、この人に付いていこうと思うのだ。これを本気で言える指導者が世界に何名いるか。

そこへ、ハシュリムとウラヌスが入ってきた。

「また市長、コーヒーなんて淹れて」

ウラヌスが呆れたように両手を広げると、ノゴロスはまた豪快に笑って

「まあ、座れ。丁度良いところに来たな」

と。これではただのお茶会のようだが、本題は当然レピュスが聞いた通りの用件である。

「ルネール地区というと、半月ほど前に奪取したばかりの地方でしたね」

レピュスにノゴロスは頷いた。

「だからまあ、幸い……要塞外に居住者は無い。地方整備を行ってる同盟軍の人間と、建築業関係の民間人の計1万5千名が生活しているわけだ」

「セデの目的は何でしょう。あそこは、占拠が簡単だった事からしてセデが重要な拠点と考えているとは思えません」

ウラヌスが言うと、レピュスが短く

「牽制だろう」

と。

「同盟軍が占拠したばかりの植民地に再び侵攻し、奪い返す事でこちら側に戦力的優位を見せつける。ついでに同盟軍に多少なりともダメージを与えれば更に良い。

セデにとって、同盟は脅威ではないが邪魔者。無ければ無いに越したことのない存在」

「そのまま大人しくしてる分には放っておくから、もう手出しするなって訳か」

ノゴロスが鼻を鳴らす。

「そうはいかん」

「はい。戦力的な問題はともかくとして、同盟市の人口がここのところ急激に増えています。それを考えてもルネール地区を押さえて、居住地域として整える事は重要ですので」

「この件に関して、政治府の連中は干渉してきていますか」

ウラヌスが綺麗な顔に憂慮を浮かべて問いかけると、ノゴロスは難しい顔をした。

「それが、気味の悪い位、大人しくしていてな。こちらに任せるという連絡を入れてきただけだ」

「万が一の事があった場合、責任を逃れるために他ならないでしょう。ルネールに侵攻を始めているセデ軍を迎え撃つというのは彼らが散々ぱら主張している“直接対決”に非常に近いものですが……いざとなって怖じ気づいたのでしょうね」

レピュスが悪口にもとれる推論を述べたが、誰もが納得してしまった。

「兎に角、同盟市は民主主義ですので。1万5千名の市民を放っておくことは出来ません。そしてルネールを失うのも痛い」

「室長は勝ち目があるとお思いで？」

ハシュリムが問いかけると、レピュスは、短い溜息をついた。

「勝つのは無理だろうが……撤退を促すまでなら出来ると思う」

「現在、ルネール地区にいる同盟軍……つまり戦闘に参加できる者は7千5百名。セデ軍は約2万5千ででしたね？　……我々は最低、2万の援軍を送らなければ勝ち目どころか生き残る算段すら立たない。一両日中に進軍準備を始めたとして、ルネールへの到着はどんなに強攻しようと4日後の夜。しかしセデ軍は、普通に考えて2日後の昼過ぎにはルネール地区に入ってしまう。第一の問題は、この2日をどう乗り切るかです」

あらかじめ考えをまとめる時間が無かったから、レピュスは作戦室メンバー、それからノゴロスとの相互確認の意味も兼ねて全ての思考を口に出していく。

「また、優先事項は非戦闘員の脱出ですが……ルネールには幸い食糧が豊富にありますから数日分の食糧を渡し、自力で最も近い同盟市勢力圏内のアフド地区に入ってもらいます。アフドの責任者のマルスには後ほど連絡します。彼はそういう事を嫌がる人間ではないから、2つ返事でしょう。
セデは西側を流れるルネール川は避け、また南西の森林地帯も避けて北東から侵攻を進めてくると思われます。これだけの戦力差がある相手に対し、自らにも危険がつきまとう視界の悪い場所でのゲリラ戦法をとる必要は全くありませんから。ルーン・マスターも50名含まれているといいますので、真正面からつぶしに掛かってくるでしょう」

「ミュリエルのように、ドラゴンなんざ召喚されたら一大事だな」

ノゴロスが渋い顔で言うと、レピュスは同じ表情で返す。

「その事について、フュリー殿に話を聞いたのですが。あの種の魔獣を1人で召喚し、コントロールするのはどう考えても不可能であるし、アンフィスに後から話を聞いたところ召喚士は相当に若かったといっます。が、何十年もの特訓なしにあれだけの力を持つ魔獣を召喚する事は出来ないとフュリー殿が。
だから恐らく、あれは無理矢理行われた実験だったのでしょう。そこで、危険性が証明された……。ミュリエルでは、半分以上のセデ兵もその魔獣の餌食になりましたから繰り返す事はしないでしょう」

「国民を何だと思ってんだ……」

「……戦の駒、でしょうね。セデ王はもしかしたら、世界を使って圧倒的に有利なボードゲームでもしているつもりなのかもしれません」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2555y/

「正義」を信じぬ者達の戦い

2012年1月10日21時45分発行